

## 「ところヲ」構文のいわゆる副詞句類について（比較社会文化学府創立10周年記念号）

Xie Xin Ping  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1302326>

---

出版情報：比較社会文化研究. 14, pp.73-79, 2003-10-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：



# 「ところヲ」構文のいわゆる副詞句類について

シャ  
謝

シン  
新  
ペイ  
平

## 1. はじめに

これまでの「ところヲ」構文に関する先行研究では、「ところヲ」を含む章を、「ところヲ」構文と見る意見、必ずしも全てを「ところヲ」構文と見做すわけではない意見、「ところヲ」補文<sup>1</sup>を従来の直接目的語とする意見、副詞句とする意見、などの様々な考えが提案され、「ところヲ」構文を規定する定義がない状況である。さらに、先行研究の数そのものも多くないのがこれまでの現状であった。

このような研究状況の中、筆者は「ところヲ」を含む文章を全て「ところヲ」構文と見做して、これらを大きく以下のように四分類することを提案した<sup>2</sup>。

### I 類 「発見」タイプの他動詞と共起する類

例：先生は太郎がカンニングしているところヲ見つけた。

### II 類 「停止・救助・攻撃・捕捉」タイプ他動詞と共起する類

例：警察は泥棒が逃げて行くところヲ捉まえた。

### III 類 自動詞（受動詞、受動態）と共起する類

例：その泥棒が逃げて行くところヲ警察に捕まえた。

彼はぐっすり寝入ったところヲいきなり頭を殴られた。

### IV 類 以下の例文のような「決まり文句」類と「逆接」類で、副詞句と公認された類

(1) お忙しいところヲお足をお運びいただきましてまことに有難うございます。

(2) 太郎が疲れきって帰宅したばかりのところヲ大勢の生徒が押しかけた。

そして、上記第II類と第III類について、先行研究の概観及び問題点の指摘後、補文全体が表現している状況・意味合いと主文との関係に着目して、これら二類を更に四類に下位分類して、その成立条件を考察した。

本論文では上記例文(1)(2)のいわゆる副詞句につい

て考察する。

## 2. 先行研究

先行研究では、「ところヲ」補文を副詞句と見做すか目的語と見做すかで意見が分かれている。許斐（1993）は上記第III・IV類を副詞句としたが、杉本（1994）は第IV類を従属節の「ところ句」とし、接続助詞相当の連語としている。以下では先行研究者間で意見の一致を見ている第IV類副詞句（節）に関する研究を概観する。

### 2.1 許斐の副詞句説

許斐（1993）は「ところヲ」補文は意味的に動詞の目的語から副詞句としての色彩の濃いものまで多岐にわたると述べている。筆者提案の第III類と第IV類を副詞句類としている。

次の例文(3)(4)に見られる「ところヲ」補文には副詞的性質があり、動詞の直接目的語と見做すことはできないと述べている。理由として、同じ文中に「ヲ」格が二つもあるにもかかわらず文法的に違和感がないので、二重『ヲ』格制約は働いていないことになる。つまり、形式的には「ヲ」格名詞句であっても、動詞の目的語として働いていなければ「ヲ」格が二つ連続共起できることを挙げている。

(3) お嬢さん、お帰りのところヲ恐縮ですが、ほんの少々我々にお付き合いいただけませんか。

(4) 「こんにちは」受付の女性も同じように答える。お客なら「いらっしゃいませ」というところヲ「こんにちは」というのは桑島が客でないことを知っているからである。

許斐（1993）は次の例文(5)(6)も副詞句として論じているが、杉本（1994）とこれらは筆者提案の第III類に属しているとの立場の小論ではこれらをいわゆる副詞句と見做していないので、ここでは論じないことにする。

(5) 犯行現場は品川の連れ込みホテルで男は寝ているところヲ首を締められたらしい。

1 「ところヲ」名詞句を「ところ補文」と「ところ補部」と呼ばれているが、ここでは「ところヲ」補文と呼んでいる。

2 杉本（1994）は第II・III類だけをところヲ構文と認める。許斐（1993）は「ところヲ補文」を含む文を全てところヲ構文と認めている。詳細は謝（2003b）『地域文化研究1号』を参照されたい。

(6) 彼はぐっすり寝入ったところヲいきなり頭を殴られたのだ。

また許斐(1993)は、副詞句の類例として、次の例文を挙げている。これらの文が容認可能なのは「雨の降る中ヲ」「忙しい中ヲ」「厳しい寒気の中を」が副詞句の働きをしているのに対して、「八木山峠ヲ」などは動詞の目的語であるによる。

(7) 彼女は雨の降る中ヲ八木山峠を超えて行った。

(8) お忙しい中ヲよくいらっしゃいました。

(9) 四人の学生は日吉館を出ると、きびしい寒気の中ヲ徒歩で新薬師寺へ向った。

## 2.2 杉本の副詞節説

杉本(1994)は、例文(1)(2)を副詞節とし、二つの特徴があると指摘した。一つは「ところヲ」句は通常文頭に置かれ、「決まり文句」であり、もう一つは、「それにもかかわらず」という逆接的な意味合いが付け加えられている点である。(次は再掲である)

(10) お忙しいところヲお足をお運びいただきましてまことに有難うございます。

(11) 太郎が疲れきって帰宅したばかりのところヲ大勢の生徒が押しかけた。

又、その理由としては、次のように副詞句は分裂文に変形できない現象があることである。

(12) \* お足をお運びいただいたのは、お忙しいところ(ヲ)だった。

(13) ?? 大勢の生徒が押し掛けたのは、太郎が疲れきって帰宅したばかりのところ(ヲ)だった。

(14) a. もうこれでおしまいかと思ったところヲ助かった。

b. ?? (僕が)助かったのは、もうおしまいかと思ったところ(ヲ)だった。

## 3. 先行研究の問題点と本論の課題

### 先行研究の問題点

以上のように、先行研究が副詞句と認める理由は主に、

3 杉本(1993)による。「一文一格の原理」は例文aのように必ずしも全ての格にも働いていない。また、例文b・cのように、連続しない場合は解消できる。

例 a 東京には上野に動物園がある。

b ?先生はその生徒をグラウンドを走らせた。

c その生徒を先生はグラウンドを走らせた。

ただし、最初の「に」は主題化しなければならない。特殊なケースであると言える。

4 許斐(1993)による。分裂文にできる現象は「ところヲ」構文に限られるわけではない。

例 太郎は花子の誠実さを褒めた。

太郎が花子を褒めたのは彼女の(その)誠実さ(ヲ)であった。

ただし、花子と誠実との関係は不可譲関係にあるように限られているみたい。

5 先行研究の例文を引用する場合は、出典を明記せず、筆者の収集例文は引用作品を明記することにする。

①「決まり文句」類は状況「中ヲ」との類似性があり、二重ヲ格の制約が働いていない(許斐1993)、②分裂文に派生できるかどうかによる(杉本1994)、の2点にある。また、例文(2)の説明は課題として残されている

①について、「二重ヲ格制約」は「一文一格の原理」に基づいているものであり、この「一文一格の原理」は未だ議論の余地がある<sup>3</sup>。この点について、筆者は認知的な考え方から議論した(謝2003a)。詳しくは次節で述べる。

②については、ある文を他の文に(受動文あるいは分裂文に)書き直すことができるかどうかはその文の性質解明には繋がらないと考えるべきである。例えば日本語の自動詞文も受動文にすることができる。分裂文も同様のことが言える。分裂文にできるかどうかを「ところヲ」構文あるいはいわゆる「副詞句」の判断基準にすることがおかしい<sup>4</sup>。

### 本論の課題

以上の理由より、第IV類のいわゆる「副詞句」の場合は、「ところヲ」補文は元々その位置に置かれるべきものであり、その位置の移動を鍵に解釈を考えるより、なぜ、このように使われているかという使用理由と意味解釈の解明のほうが大切と考える。

具体的には先ず、「ところヲ」名詞句の意味合いと、「ところヲ」名詞句と共起する述語あるいは主文との関係を解明する。

## 4. いわゆる副詞句「ところヲ」構文の下位分類

先行研究の例文が多くない現状から、573文芸作品から抽出した1301個の「ところヲ」を解析して得られた80の例文を分類して、その特徴を観察する<sup>5</sup>。

先行研究通り、これらを①「決まり文句」類と②「逆接」類に大別する。

### 4.1 「決まり文句」類

#### α類

この類の特徴は、「ところヲ」名詞句は文頭に置かれ、「ところ」を修飾する詞の性質は形容詞など形容詞性質がある

詞であることである。特殊な、好ましくない状況を表してある。また後の述語部との連動でこの状況が無視し、考えなかった意味合いがあると解釈できる。場合によっては、意志を表す程度副詞「わざわざ」などが述語の前に来ることもある。また、事実を問題にしない場合は遠慮と謙遜の意味合いが含まれている。

(15) 「御用で忙がしいところを氣の毒だが、少しお前に聞いて貰ひたいことがあるんだが……。」と、をちさんは左右を見まはすと、半七は快く首肯(うなづ)いた。(引用作品1)

(16) その調子は忙がしいところを暇を潰(つぶ)させて氣の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくて氣の毒だという冗談のように聞こえた。(引用作品2)

(17) 「ええと、前略、先刻は遠路のところをわざわざご苦労さまにそろ。その節ご検死くださいそうらえども、埋葬ご許可のおことば承り漏れそうろうあいだ、使いの者をもっておん伺い申し上げそろ。(引用作品3)

(18) 「こちらでも、糸子さんやら、一(はじめ)さんやらで、御心配のところを、こんな余計な話を申し上げて、さそ人の氣も知らない呑氣(のんき)な女だと覺(おぼ)し召すでございませうが……」(引用作品4)

(19) 「……寒いところを御苦労だが、なにぶん頼むよ」あくる朝、政吉は雨にぬれて吉原を出るところを大門(おおもん)口で捕えられた。(引用作品5)

#### β類

α類と同じ、「ところヲ」名詞句が文頭に來、「ところ」を修飾する詞の性質は形容詞など形容詞性質がある詞である。また、状況は決してよいものではない。述語の前に意志を表す「無理」「無理矢理」の程度副詞などが現れることもある。

α類と異なる点は、その場の具体的な状況を表し、その状況は無視し、停止させる意味合いもある点である。事実を表し、謙遜と遠慮の意味合いは含まれない。

(20) 少し柄がいいので、手元の苦しいところを思い切って契約してみると、二月三月も稼(かせ)いでいるうちに、風邪(かぜ)が因(もと)で怪しい咳(せき)をするようになり、寝汗をかいしたりした。(引用作品6)

(21) 「そう。じゃその変なところを云ってちょうだいな、いくらでも説明するから」それで由雄さんが病氣のと

ころを無理に來まして、……。 (引用作品7)

(22) 危いところを注射で取り留めたほかは何事もなかった。(引用作品8)

(23) 「……危いところを梯子をかけて煤で真黒になりながら、赤い煙突の下へ管を通して、無理矢理に煙を出したんでございます。……」(引用作品9)

(24) 「お嬢さまですか? 暗いところをよくまあ。炉のほうへ、さあ寄ってくださいえ」(引用作品10)

(25) そこの謎が解けねえので、どうも確かなところを掴むことが出来ませんよ」いかに酔い潰れていると云っても、眼と鼻のあいだの近いところを駕籠に乗せて帰るのは少しおかしいと、半七はその駕籠屋を呼んで詮議する。(引用作品11)

#### 4.2 「逆接」類

逆接類は、大きくは二つに下位分類できる。

##### γ類

「ところ」の本来の実質意味がまだ残され、主文の動詞は他動詞で、「ところヲ」を目的語と考えられる。中国語の他動性が高い典型的な他動詞文「把字句」に訳すことができる。<sup>6</sup>「ところヲ」補文と主文の意味関係は、「ところヲ」補文は本来すべきことを表し、主文はわざとし、あるいはわざとしなかったことを表す。

(26) 「そういう仁義(じんぎ)に欠ける者は、猫畜生に劣る」犬畜生というべきところを猫畜生といった……。 (引用作品12)

訳：「那種缺少仁義的家伙不如猫畜生」把應該說狗畜生的地方說成了猫畜生……。

(27) 「を」類で書くべきところを「お」類で書き、「お」類で書くべきところを「を」類で書くというような間違いが出来て混乱して來た。(引用作品13)

訳：把該用「を」類写的、錯用「お」類写、把該用「お」類写的、錯用「を」類写。出現如此錯誤、引起了混亂。

(28) 「なるほど」というべきところを、わざと「なある」と引張ったり……。 (引用作品14)

訳：把本該說「確實如此」的地方、故意拖長說「確實一」……。

以上のように解釈できるケースは、「ところヲ」の実質意味が残されていると理解できる場合に限られているようである。次の例文からも根拠付けられそうである。

(29) ジョージはピストルを続け撃ちにして、あぶないところを逃がれましたが、それつきり姿を晦まして何処へ行ったのか判りません。(引用作品15)

(30) お前も私も少(すこ)しのところを辛抱して、い

6 中国語訳は筆者によるものである。

つその事博士（はかせ）になって喜ばしてくれんか。  
（引用作品16）。

例文(29)は、「ところヲ」補文は具体的な危険な「境界」を表し、例文(30)は、「ところヲ」補文が具体的な時間を表していると考えられるから従来の目的語と見てよい。γ類「ところヲ」補文に「ところ」の実質性質が残されている点から考えても、「ところヲ」補文が例文(29)(30)と同じく、従来の目的語と考えられる。

### δ類

本来あるべき状態を違う状態に変える、あるいは、本来すべきことをしなくて違うことをした類である。つまり、「ところヲ」補文は本来すべきこと、あるべき状態であり、主文はその状態を変え、そのことをせず、違うことをする。γ類と異なって、「ところ」の実質性質が無くなり、抽象的な形式名詞になりつつある。

(31) それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。（引用作品17）

(32) 私はやむを得ず、口でいうべきところを、筆で申し上げる事にしました」（引用作品18）

(33) 自分も乗気になって一二分で済むところを三倍ほどに語り続けた。（引用作品19）

(34) 普通なら玄関の前へ来て、郵便と大きな声を出すべきところを、無言のまますすたすた敷台から教場の中へ這入（はい）って来た。（引用作品20）

(35) 彼等は今七時間働いているところを六時間だけ働くだろう。（引用作品21）

(36) そして、その罰で、蘇苔（こけ）みたいに皮膚の上に厚くなる垢のやうなものが、心の底にも重つ苦しくたまつて来るのであるが、普通なら耐へられないところを、無神経を装つて鈍感である。（引用作品22）

以上のように δ類「ところヲ」補文は、「ところ」の実質性質が薄くなる、あるいは、無くなって形式名詞として機能し、「ヲ」格との共起によって接続詞に近い働きをする。しかし「ヲ」格との共起によって、ある状況、ある事態の方向性を変える意味合いが含まれている。また、「ところヲ」補文と主文は強く関わっているように見える。

## 5. 「ところヲ」構文の「決まり文句」類と状況「中ヲ」構文

「ところヲ」構文のいわゆる副詞類の類例として、許斐(1993)は次の例文を挙げ「中ヲ」構文との類似性を指摘している（例文(7)(8)を再掲する）。

(37) お忙しい中ヲよくいらっしやいました。

(38) 彼女は雨の降る中ヲ八木山峠を超えて行った。

それに対し杉本(1994)は、「ところ」が「時」を表し、「中」が「場所」を表し、形式名詞が異なることと、テンスに関しては例文(39)のように「ところヲ」補文の動詞が自由で、例文(40)のように「中ヲ」補文の動詞が未完了形しか取れないことと、例文(41)のように「ところヲ」構文の主文の動詞が瞬間的な動作、短い持続の動作を表し、例文(42)のように状況補語を取る動詞が持続的な動作を表していることから、両者を区別している。

(39) a 警官は犯人が自宅に立ち戻るところヲ捕まえた。

b 警官は犯人が自宅に立ち戻ったところヲ捕まえた。

c 警官は犯人が自宅に立ち戻っているところヲ捕まえた。

(40) a 花嫁は皆が花を投げる中ヲ歩いて行った。

b \*花嫁は皆が花を投げた中ヲ歩いて行った。

c ?花嫁は皆が投げている中ヲ歩いて行った。

(41) a 僕は彼女が困っているところヲ助けあげた。

b ??僕は彼女が困っているところヲ3年間助けあげた。

(42) a \* 太郎は雪が降る中ヲ立ち上がった。

b 太郎は雪が降る中を3時間も歩きまわった。

以上のように、「ところヲ」構文は「中ヲ」構文と類似しているという意見と類似していないという意見に分かれている。杉本(1994)が問題にしている例文は筆者が第II類に分類しているタイプで、ここでは、深く検討しない。第II類については小論(謝2003b)を参照されたい。

本論は許斐(1993)と同じく、「ところヲ」構文と「中ヲ」構文は類似性があると考えられる。以下の例のように「お忙しいところヲ」と「お忙しい中ヲ」の両者には確かに「決まり文句」の感があり、「ところヲ」構文は「中ヲ」状況補語と類似していると考えられる。

(43) お忙しいところヲ(かまわず)お足をお運びいただきましてまことに有難うございます。

(44) お忙しい中ヲ(かまわず)よくいらっしやいました。

只、許斐(1993)と解釈が異なるのは、この場合の「ところヲ」名詞句は「中ヲ」状況補語と同じく従来の目的語と考えられる点にある。

小論(謝2003a)では、「中ヲ」状況補語が従来の目的語であり、「中ヲ」構文には他動性があることを主張した。さらに、「中ヲ」名詞句には「状況」が既知で、「話し手・動作主」にとって好ましくないか特殊であり、この好ましくない「状況」をかまわず、恐れずに戦っていく心的プロセスがあることを中国語訳との対比から指摘した。「中ヲ」に対

応する動詞が例文(42)のように、「簡略概括表現」<sup>7</sup>によって表面的には現れていない場合でも人間の認知判断によって意志性のある動詞との連動関係が理解できる。

(45) 医者が雨の中ヲ帰った後……。 (大夫冒雨回去以後)

(46) 彼は雨の中ヲ歩きながら……。 (彼冒雨走……)

ここでは、「決まり文句」類例文(15)–(25)を繰り返し、例文(47)–(57)として再掲し、確認する。

(47) 「御用で 忙がしいところを (配慮せず) 氣の毒だが、少しお前に聞いて貰ひたいことがあるんだが……。」と、をぢさんは左右を見まはすと、半七は快く首肯(うなづ)いた。(引用作品1)

(48) その調子は忙しいところを (配慮せず) 潰(つぶ)させて氣の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくて氣の毒だという冗談のように聞こえた。(引用作品2)

(49) 「ええと、前略、先刻は遠路のところを (気にせずに) わざわざご苦労さまにそろ。その節ご検死くださいそうらえども、埋葬ご許可のおことば承り漏れそうらうあいだ、使いの者をもっておん伺い申し上げそろ。(引用作品3)

(50) 「こちらでも、糸子さんやら、一(はじめ)さんやらで、御心配のところを (配慮せずに)、こんな余計な話を申し上げて、さぞ人の氣も知らない呑氣(のんき)な女だと覺(おぼ)し召すでございましょうが……」(引用作品4)

(51) 「……寒いところを (気にせずに) 御苦労だが、なにぶん頼むよ」あくる朝、政吉は雨にぬれて吉原を出るところを大門(おおもん)口で捕えられた。(引用作品5)

(52) 少し柄がいいので、手元の苦しいところを (考えずに) 思い切って契約してみると、二月三月も稼(かせ)いでいるうちに、風邪(かぜ)が因(もと)で怪しい咳(せき)をするようになり、寝汗をかいたりした。(引用作品6)

(53) 「そう。じゃその変なところを云ってちょうだいな、いくらでも説明するから」それで由雄さんが病氣のところを (気にせずに) 無理に来まして、……。 (引用作品7)

(54) 危いところを注射で取り留めたほかは何事もなかった。(引用作品8)

(55) 「……危いところを (気にせず) 梯子をかけて煤で真黒になりながら、赤い煙突の下へ管を通して、無理矢理に煙を出したんでございます。……」(引用作品9)

(56) 「お嬢さまですか? 暗いところを (気にせずに) よくまあ。炉のほうへ、さあ寄ってくだせえ」(引用作品10)

(57) そこの謎が解けねえので、どうも確かなところを擱むことが出来ませんよ」いかに酔い潰れていると云っても、眼と鼻のあいだの近いところを (かまわず) 駕籠に乗せて帰るのは少しおかしいと、半七はその駕籠屋を呼んで詮議する。(引用作品11)

以上のように、「中ヲ」構文と同じく「ところヲ」名詞句の後にも表面的には現れていないが認知的に容易に想像が付く括弧内のような述語が存在すると解釈できる。例文(52)は共起する動詞が他動詞で例外と考えられる。

結論として、いわゆる「決まり文句」副詞句は「中ヲ」構文と類似し、「ところヲ」名詞句が従来の目的語と考えられる。類似している点は、①「ところヲ」と「中ヲ」名詞句は共に特殊な、好ましくない状況に使われることが多い、②単純には表面上の動詞と対応していないが、共起する動詞との連動で、ある状況が無視する意味合いがある、③認知的「簡略概括表現」によって表面に出てない動詞があると解釈できる、の3点である。両者とも従来の目的語と考えられる。

## 6. 結び

本論は筆者の先行研究で副詞句(節)と分類した第Ⅳ類について考察した。先ず第Ⅳ類を、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta$ の四類に下位分類し、「ところヲ」名詞句の意味合いと主文の意味関係の観点から考察した。第Ⅳ類のどの下位分類に属するかは使用状況に依存する。

これら第Ⅳ類の下位四分類の特徴は次のように結論付けられる。まず、「決まり文句」類の $\alpha \cdot \beta$ 類は、「ところヲ」名詞句が特殊で好ましくない状況を表し、「簡略概括表現」として表面に現れていない動詞が存在するが、共起する述語との連動で意味が正確捉えられることが特徴である。「わざわざ・無理」などの意志を表す語が述語と共起する。この類は従来の目的語と見ていい。

「逆接」 $\gamma$ 類は「ところ」本来の実質意味が残り、主文の動詞が他動詞で、補文と主文の関係はあるべき状態を別の状態に変える意味合いがあることが特徴である。中国語の他動性の高い他動詞文「把字句」に対応する。この類も従来の目的語と見ていい。

「逆接」 $\delta$ 類は「ところ」の実質性質が薄く、「ヲ」格との共起で一つの接続詞として機能していることが特徴である。この側面から見れば、副詞句として見ていい。「ヲ」格

7 詳細は謝(2003a)を参照されたい。

との共起で「ところヲ」補文と主文の述語部が強く関わり、ある事態と状況の方向性を変える意味合いがある。

「ところヲ」構文の考察が難しい点は、「ところヲ」補文と主文述語の関係を統語的に説明し難い点にあった。したがって、補文の意味合いと、補文と主文との意味関係とを明らかにすることが「ところヲ」構文の理解に有効なアプローチである考える。

### 参考文献

- 柴田方良(1978) 『日本語の分析』 大修館書店出版  
 許斐慧二(1993) 「「ところ」補文のシンタックス」、『言語学からの眺望』福岡言語研究会編、九州大学出版  
 杉本 武(1993) 「状況の「を」について」、『九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学篇)』6、九州工業大学出版  
 杉本 武(1994) 「警察はその泥棒が逃げていくところを捕まえた」再考、『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』7、九州工業大学出版  
 謝 新平(2003 a) 「状況「ヲ」格の他動性について - 中国語訳との対照から -」国語学会2003年度春季大会  
 謝 新平(2003 b) 「ところヲ」構文の一分類について - 「状況述語句が表す状況」の視点 - 地域文化研究 第1号

### 資料編

#### 「決まり文句」類

- (1) 「親分。忙がしいところを濟みません。飛んだ厄介物を担(かつ)ぎ込んで……亀吉は云った。(引用作品23)
- (2) 僕は大変なところをうっかりしていたもんだ。(引用作品24)
- (3) 拝啓昨日はおいそがしいところを貴重な時間を割き御引見下され有難う存じました。(引用作品25)
- (4) 「お忙しいところを、ようこそいらせられました。(引用作品26)
- (5) 「三人ともいそがしいところをよく出て来てくれた。(引用作品27)
- (6) ほんとに義兄さんには多忙(いそが)しいところを毎度毎度こんなつまらぬことで御心配ばかりかけて濟みません。(引用作品28)
- (7) お急がしいところをどうも濟みません。きつとこの人も出てゆきますから。(引用作品29)
- (8) 「いそがしいところをお邪魔だろうが、一寸相談して見たいことがあったのでね。(引用作品30)
- (9) 「こんにちは。お忙しいところを暫くお邪魔いたします。(引用作品31)
- (10) 「どうも今日はお忙しいところをすみませんでした。(引用作品32)
- (11) 「旅のお疲(つかれ)のところを、お伺いいたします御無礼をお赦(ゆる)し下さい。(引用作品33)
- (12) これも跣足になって駆け出して、もうひと足のところを汀(みぎわ)から危うく曳き戻した。(引用作品34)
- (13) おじさん、遠いところをご苦労でございますな。(引用作品35)
- (14) 遠いところをきのどくだが、見たとおり、ただの首くくりじゃねえ。(引用作品36)
- (15) 間一髪のところを上(う)にそれつつ、プツリとまたふすまに突きさりましたものだから。(引用作品37)
- (16) 「昨夜は御忙(おいそが)しいところを……」と女は入口に近く

手をつかえる。

(引用作品38)

- (17) 「どうも御邪魔をしました。御忙がしいところを。いずれまたその内」。(引用作品39)
- (18) お忙がしいところを甚だ御迷惑とも存じますので、手前もいろいろ考えたのですが……。 (引用作品40)
- (19/20) いや、わたしももう帰る。忙がしいところを気の毒だったな「わたくしもそんなお噂を伺いました。いや、どうもお急ぎのところをお引き留め申しまして相済み ませんでした。では、これで御免ください。(引用作品41)
- (21) 節季の忙がしいところを御苦労でした。(引用作品42)
- (22) お忙がしいところを御相談に出ました殊にこの頃は自分の前非をしきりに後悔しているので。(引用作品43)

#### 「逆接」類

- (1) すでに切腹にも及ぶべきところを、その金を年賦にして三年間に返納するということで、まずは無事に長(なが)の暇(いとま)となったのである。(引用作品44)
- (2) 外の学者が五十年かかるところを、博士は十年で成績をあげている。(引用作品45)
- (3) 副食物は牛肉又は豚肉半斤、魚肉半斤、玉葱又はその他の野菜若干量という約束のところを、二三尾の小鯛に、十日に一度、茄子が添えられるだけであった。(引用作品46)
- (4) 普通何の某家と書くところを、わざとそうしたのは無論宣伝のためであったろう。(引用作品47)
- (5) 軟派が曝露して罰金や牢屋ですむところを、硬派は命をかけなければならなかった。(引用作品48)
- (6) 今の銭相場は一両で六貫四百文するところを、一両について四貫四百文替えに相談がまとまったとか言っていますね。(引用作品49)
- (7) ふだんならば一も二もなく父をかばって母に楯(たて)をつくべきところを、素直(すなお)に母のするとおりになって、葉子は母と共に仙台に埋(うず)もれに行った。(引用作品50)
- (8) 一尺の歩幅で行くところを、八寸にも七寸にも縮めて。(引用作品51)
- (9) 四俵のはずのところを二俵で勘弁してくれと云う禰宜様宮田を、上の板の間に蹲踞(しゃが)んで見下していた年寄り、思わずできるだけ賃金を貰いたさに……。 (引用作品52)
- (10) 番人のお婆さんに二十センチ(ざつと三錢だ)のところを五十センチ蓄発してはいつて見ると。(引用作品53)
- (11) 何でも三月からなくちゃ卒業の出来ねえところを、宅の悴はたった二週間で立派にやっちゃった。(引用作品54)
- (12) 徳川幕府の寿命がまだ十年持つところを、九年早めてしまったような形勢は争うべからざるものであります。(引用作品55)
- (13) 平生なら二十分でいけるところを、二時間も三時間もかかったと言っていた人があります。(引用作品56)
- (14) 貴重品の入れてある家財道具に着目すべきところを、右門は例のごとくその逆のからめてをたどって……。 (引用作品57)
- (15) お手当にすべきところを特に見のがして慈悲をたれてやった掬摸(すり)の名手のあぐし巻きお由が……。 (引用作品58)
- (16) 七十錢ぎめのところを一円やりました。(引用作品59)
- (17) 一度厭(いや)な思いをすればいいところを、二度しなければならぬことになる。そんな馬鹿なことって無いんだ。(引用作品60)
- (18) その先へ進むはずのところをツイわき道へそれて職業上の片輪(かたわ)という事を御話し出したから。(引用作品61)
- (19) 実は菊を買うはずのところを、植木屋が十六貫だと云うので、五貫に負けると値切っても相談にならなかった。(引用作品62)
- (20) 勧業銀行の辺(あたり)で下りるはずのところを、つい桜田本郷町まで乗り越して驚ろいてまた暗い方へ引き返した。(引用作

- 品63)
- (21) 私はやむを得ず、口でいうべきところを、筆で申し上げる事にしました。(引用作品64)
- (22) とうに帰るべきところを、わざと尻(しり)を据(す)えて四方八方(よもやま)の話をしていた。(引用作品65)
- (23) いつもは規定として三膳食べるところを、その日は一膳で済ました後(あと)、梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑(の)んだ。(引用作品66)
- (24) 端書(はがき)でも用の足りるところを、鄭重(ていちょう)に封筒へ入れて三銭の切手を貼(は)った。(引用作品67)
- (25) 満足すべきところを、足に任せて天下を横行して、憚(はば)からぬのが災(わざわい)になる。(引用作品68)
- (26) 「急ぐって先月中に越すはずのところをあさっての天長節まで待たしたんだか。(引用作品69)
- (27)(28)(29) 三度のところを一度にし、それもとゞ「変わったことがありますせんか」位にとゞめる。それは始めのうちはお互いの調子がうまくとれないで、どまつき、同じところをグル／＼めぐりをしたりした。会社では此頃五時のところを六時まで仕事をしてくれとか、七時までにしてくれとか云って、その分に対しては別に賃銀を支払うわけでもなかった。私は今まで乗りものを使っていたところを歩くことにした。(引用作品70)

- 引用作品41: 岡本綺堂 「半七捕物帳 白蝶怪」
- 引用作品42: 岡本綺堂 「半七捕物帳 三河万歳」
- 引用作品43: 岡本綺堂 「半七捕物帳 向島の寮」
- 引用作品44: 岡本綺堂 「半七捕物帳 大阪屋花鳥」
- 引用作品45: 海野十三 「国際殺人団の崩壊」
- 引用作品46: 織田作之助 「わか町」
- 引用作品47: 織田作之助 「わか町」
- 引用作品48: 黒島伝治 「武装せる市街」
- 引用作品49: 島崎藤村 「夜明け前 第一部下」
- 引用作品50: 有島武郎 「或る女(前編)」
- 引用作品51: 宮本百合子 「貧しき人々の群」
- 引用作品52: 宮本百合子 「禰宜様宮田」
- 引用作品53: 大杉栄 「日本脱出記」
- 引用作品54: 徳田秋声 「驅」
- 引用作品55: 中里介山 「大菩薩峠 駒井能登守の巻」
- 引用作品56: 鈴木三重吉 「大震災災記」
- 引用作品57: 佐々木味津三 「右門捕物帖 達磨を好く遊女」
- 引用作品58: 佐々木味津三 「右門捕物帖 明月一夜騒動」
- 引用作品59: 田中英光 「オリンポスの果实」
- 引用作品60: 佐左木俊郎 「街底の熔鋳炉」
- 引用作品61: 夏目漱石 「道楽と職業」
- 引用作品62: 夏目漱石 「変な音」
- 引用作品63: 夏目漱石 「彼岸過迄: 彼岸過迄に就て」
- 引用作品64: 夏目漱石 「ころ」
- 引用作品65: 夏目漱石 「草枕」
- 引用作品66: 夏目漱石 「道草」
- 引用作品67: 夏目漱石 「門」
- 引用作品68: 夏目漱石 「作物の批評」
- 引用作品69: 夏目漱石 「三四郎」
- 引用作品70: 小林多喜二 「党生活者」

### 引用文献

- 引用作品1: 岡本綺堂 「半七捕物帳 お文の魂」
- 引用作品2: 夏目漱石 「ころ」
- 引用作品3: 佐々木味津三 「右門捕物帖 卍のいれずみ」
- 引用作品4: 夏目漱石 「虞美人草」
- 引用作品5: 岡本綺堂 「半七捕物帳 広重と河瀬」
- 引用作品6: 徳田秋声 「縮図」
- 引用作品7: 夏目漱石 「明暗」
- 引用作品8: 徳田秋声 「徴」
- 引用作品9: 渡辺温 「赤い煙突」
- 引用作品10: 佐左木俊郎 「恐怖城」
- 引用作品11: 岡本綺堂 「半七捕物帳 蟹のお角」
- 引用作品12: 海野十三 「烏啼天駆シリーズ・1 奇賊は支払う」
- 引用作品13: 橋本進吉 「古代国語の音韻に就いて」
- 引用作品14: 夏目漱石 「道草」
- 引用作品15: 岡本綺堂 「半七捕物帳 妖狐伝」
- 引用作品16: 尾崎紅葉 「金色夜叉」
- 引用作品17・18: 夏目漱石 「ころ」
- 引用作品19: 夏目漱石 「行人」
- 引用作品20: 夏目漱石 「満韓ところどころ」
- 引用作品21: 宮本百合子 「なぜソヴェト同盟に失業がないか」
- 引用作品22: 武田麟太郎 「大凶の籤」
- 引用作品23: 岡本綺堂 「半七捕物帳 正雪の絵馬」
- 引用作品24: 小栗虫太郎 「聖アレキセイ寺院の惨劇」
- 引用作品25: 尾崎秀実 「遺書」
- 引用作品26: 佐々木味津三 「右門捕物帖 因縁の女夫雛」
- 引用作品27: 島崎藤村 「夜明け前 第一部下」
- 引用作品28・29: 近松秋江 「うつり香」
- 引用作品30: 宮本百合子 「宮本百合子牡丹」
- 引用作品31: 宮本百合子 「道標」
- 引用作品32: 宮本百合子 「風知草」
- 引用作品33: 横光利一 「罌粟の中」
- 引用作品34: 岡本綺堂 「箕輪心中」
- 引用作品35: 佐々木味津三 「開運女人地藏」
- 引用作品36: 佐々木味津三 「右門捕物帖 首つり五人男」
- 引用作品37: 佐々木味津三 「右門捕物帖 曲芸三人娘」
- 引用作品38: 夏目漱石 「虞美人草」
- 引用作品39: 夏目漱石 「道草」
- 引用作品40: 岡本綺堂 「半七捕物帳 弁天娘」